

## 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成27年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	大阪大学	整理番号	A02
プログラム名称	超域イノベーション博士課程プログラム		
プログラム責任者	東島 清	プログラム コーディネーター	藤田 喜久雄
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中間評価において指摘した各留意事項は真剣に検討され、対処されている。指摘自体が簡単に解決できる問題だけではないので、対処の結果が直ちに成果に現れてはいない点もあるが、少し長い目で見守りたい。</li> <li>・ 具体的な対応内容は以下のとおりである。             <ol style="list-style-type: none"> <li>① 本プログラムの効果の客観的評価については、学習者の視点に立ち、獲得すべき能力や必要とされる行動などの項目ごとに学習目標を明確にし、目標に達するまでのレベルを成長段階に対応して細かく規定し、学生の学習も教員による評価もしやすくなるよう、各科目と関連づけつつ、更に整理・工夫される見込みである。</li> <li>② 学生の指導能力の涵養、及び教員の意思統一を図るため、FD ワークショップの開催など、FD 活動の充実に努めている。</li> <li>③ QE における新たな方式として、リサーチプロポーザルの審査による専門力の評価、単位取得状況・成績の GPA (グレードポイントアベレージ) ・International English Language Testing System (IELTS) の成績による履修結果の評価、独自に設定した超域コンパス (Components Of Mastery, Performance, Attitude, and Skill Sets) を用いた総合評価などを設定し、客観的評価体制を構築しつつある。</li> </ol> </li> </ul> <p>2. 意見 (改善を要する点、実施した助言等)</p> <p>以下の点について、更に検討を続けていただきたい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 「超域イノベーション総合」などの科目の内容が表面的なものにとどまっているように思われる。対象となる課題の実践的専門家の参画をより充実させるとともに、学生との意見交換をより活発にさせるなど、問題を深く追求し真の解決に至る困難な経験を積めるよう、プログラムの科目内容を充実させていくことが求められる。</li> <li>② 同時に、超域の“Knowledge”の基幹となる各学問領域の基盤的な考え方・方法論を、大学全体の学生が広くかつ深く“Integrative”に学べるように、各研究科の専攻毎に置かれる専門基礎科目の内容の大学全体としての見直しを始めるべき時期に来ていると思われる。</li> <li>③ プログラムと専門科目を担当する研究科との間の調整は以前から重要な事項として指摘してきたが、依然としてプログラムの講義や演習が集中して行われる金曜日に研究室ゼミを行うなど、調整が不十分な点が見受けられる。</li> <li>④ プログラムの一部の講義に対しては、担当教員の研究の狭い領域の話題になるなど、プログラムとの関係が希薄な内容になりがちであること、講義がわかりにくいなど、学生の不満がある。</li> <li>⑤ プログラム全体の指導法について疑問を持つ学生がいる。具体的には国内及び海外研修において、基礎知識がない学生に考えさせられても表面的な答えしか出せない、という不満や、学生の発表に対して教員側からの評価、フィードバックがないという不満がある。学生に自主的に徹底的に考えさせる方針か、ベテランの教員がヒントだけ与えるのか、あるいはすべてを教授するのか、指導方針について学生と話し合う必要がある。</li> </ol>			